

新十津川町開拓記念館 展示品紹介

昭和55年8月の開館から、新十津川町開拓記念館は41年目を迎えました。記念館は、開拓移住者の偉業をたたえ、歴史を伝える郷土資料館です。今号が8月号広報であることから、8月15日（終戦記念日）に関連して、先の大戦に関する記念館の展示品を紹介いたします。

千人針

記念館に展示している千人針は、昭和59年に寄贈されたものです（写真）。千人針とはどのようなものでしょうか。

一片の布に千人の女が赤糸で一針ずつ縫って千個の縫玉を作り、出征将兵の武運長久・安泰を祈願して送ったもの。日清・日露戦争の頃に始まり、初めは「虎は千里を走って千里をもどる」の言い伝えから寅年生まれの女千人の手になったものという。（『広辞苑（第4版）』）



記念館に展示している千人針にも、次のものが縫い付けた結び目で描かれています。
・武運長久（兵士がいつまでも無事であること）
・虎

▼死線を越えて苦戦を越えて

千人針には、五銭硬貨や十銭硬貨が縫い付けられることもありましたが、五銭硬貨、死線（四銭）を越えて、生還することの願いや、まじないを込めて縫い付けられました。
・十銭硬貨 不利な状況である苦戦（九銭）を越えて、戦争に勝利する願いや、まじないを込めて縫い付けられました。
写真の千人針には、硬貨が縫い付けられていませんので、戦後に硬貨を取ったのかもしれない。

▼千人針の制作と使われ方

広辞苑には寅年生まれの女千人とありますが、戦争が激しくなってくると、千人針の制作は、母、妻、恋人、そして地域の女性（婦人会）が担いました。千人針は多くの方の「願い」が込められたものであり、戦地に持参されました。交戦中は、弾除けになるといわれるがあつたことから、腹巻や肩から掛け巻き付けて使用されました。

■奉公袋

軍から召集令状が来ると、指定された日時に部隊に入らなければなりません。この時に必要物品をまとめて入れておくのが奉公袋です。
裏には次のものが記載されており、急な命令にも、必要なものを忘れずに持参できるよう工夫されています。
一 軍隊手帳、勲章、記章
二 適任証書、軍隊における特業教育に関する詔書
三 召集及び点呼令状
四 その他貯金通帳等応召準備のため必要と認めるもの
※応召 呼び出しに応じること



■国旗

「国を守る」「国への忠誠」などの意味から、国旗（日の丸）に、銃後の者（国に残る地域の人、友人、家族、職場の仲間）が出征兵士への思いを書き込みました。このような慣習は、欧米にはないそうです。白地の中心に赤丸があるため、他国の国旗に比べ放射線状に思いを書き込みやすかったためか、日本独自のものでした。

▼国旗への寄せ書き

元アメリカ軍兵士（またはその遺族）から、元日本軍兵士（またはその遺族）へ、寄せ書きされた国旗の返還のニュースが、時折流れています。寄せ書きされた日の丸は、出征する（戦地に赴く）兵士の武運長久を願って、地域、友人、家族、職場の仲間が贈ったものです。贈り主が女性だけではないことが、千人針との違いです。思いを胸に戦うとの考えから、多くの兵士は交戦中に日の丸を胸ポケットに入れていました。

▼新十津川青年団第七支部

この寄せ書きは、新十津川青年団第七支部が贈呈したことが分かります。第七支部は、現在の弥生区に組織されていました。寄せ書きには次のことが記されています。
・勇め
・元気で働け
・郷土の生まれ
・新十津川のつはもの
・義は山岳より重く死は鴻毛より軽し

▼祝出征 加藤高忠君

先に紹介した千人針、奉公袋、国旗は、加藤高忠さん（故人）から寄贈を受けたものです。加藤さんは現在の弥生区に居住していました。

これらを、加藤さんが開拓記念館に寄贈したのは、地域や仲間、家族からの応援を戦争後も大事にしていたこと、後世にも戦争という悲惨な出来事を伝えたい気持ちがあつたことが背景にあると考えられます。

この他にも、開拓記念館には、町民から寄贈を受けた戦争にまつわる品々を保管、展示しています。今年は終戦から75年の節目を迎えますので、ぜひご覧ください。

■次号案内

広報9月号では、開町130年を記念して特別展示をしている、道庁赤れんが庁舎所蔵絵画《入植地の測設》の展示と、鉄道関係物品の展示について紹介します。

■施設案内

- ・開館期間 10月31日(土)まで
- ・開館時間 午前10時～午後4時
- ※金曜のみ午前10時～午後1時
- ・入館料
- ・高校生以上 200円
- ・小学生 100円
- ・町内小中学生は無料
- ・問合せ 開拓記念館

☎ 76・2622

